

# JAPAN KENZAI FAIR 2026

February 12–13, 2026 | Tokyo Big Sight

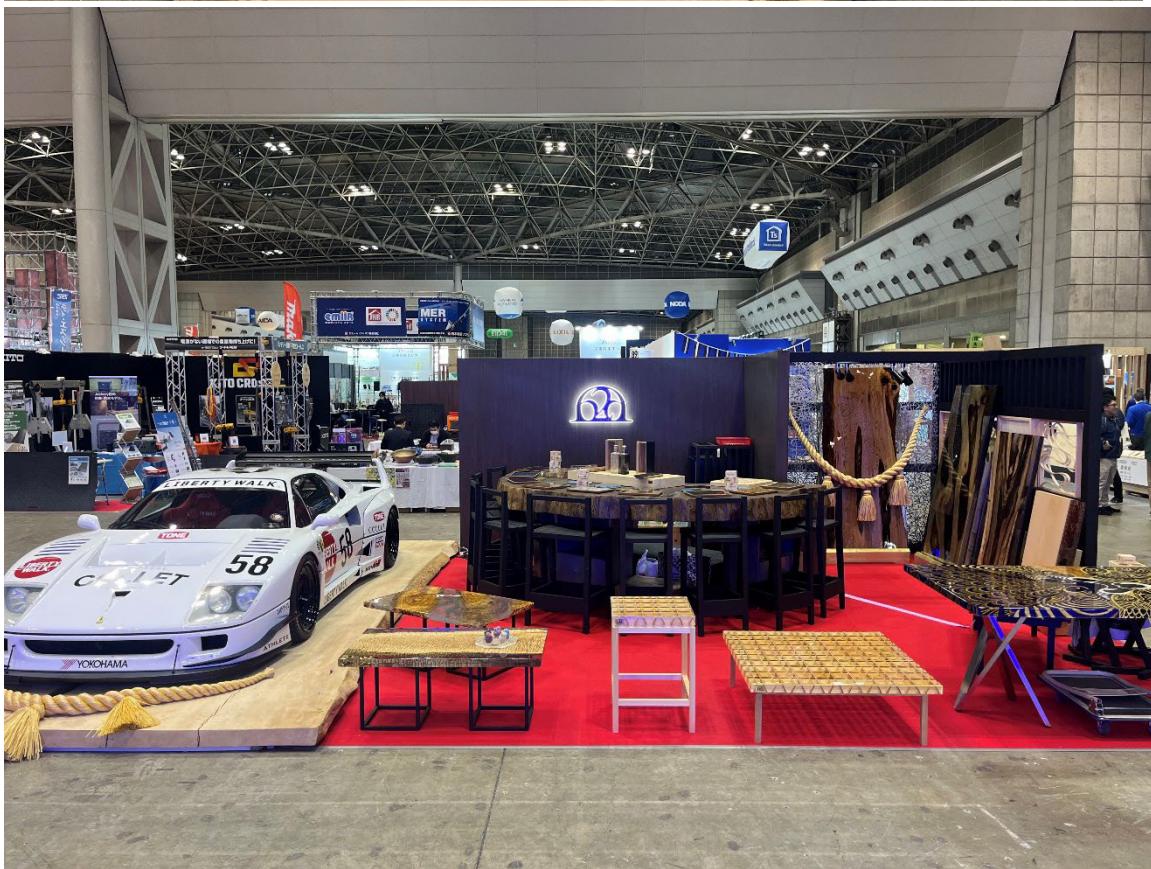
On February 12–13, 2026, we participated in the Japan Kenzai Fair held at Tokyo Big Sight, providing strategic support to our partner, 626.

This exhibition was designed to move beyond a conventional trade show format. With wood as the central element, the booth integrated art, traditional craftsmanship, and motor culture into a unified experiential environment.

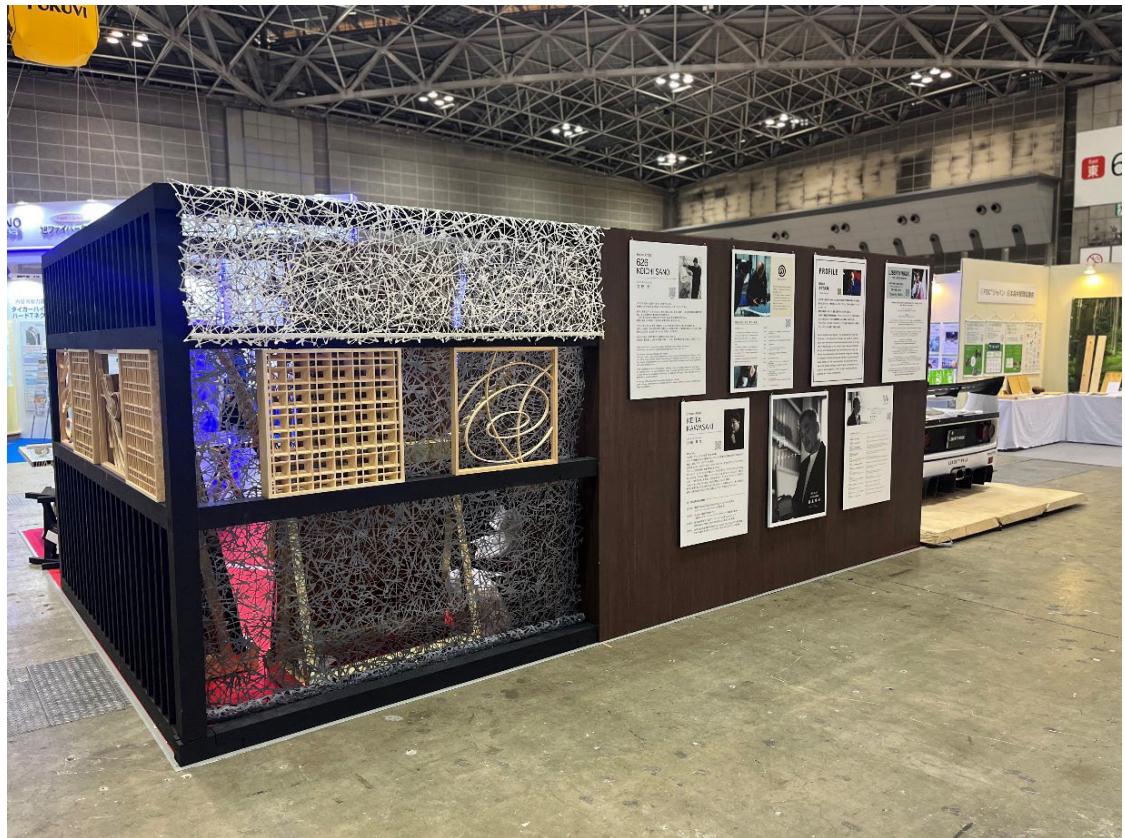
The cross-disciplinary presentation generated strong engagement throughout the event.

Our booth maintained a continuous flow of visitors over the two-day period, reflecting both market interest and the effectiveness of the collaborative concept.

The event provided a valuable opportunity to demonstrate how material innovation and cultural collaboration can create new value within the construction and design industries.









## Participating Artists (In No Particular Order)

- 626 – Resin Artist  
Koichi Sano
- Noguchi Naohiko Institute – Master Sake Brewer, widely regarded as a legendary figure in sake craftsmanship Naohiko Noguchi
- LIBERTY WALK – Globally recognized leader in custom automotive culture Wataru Kato
- Tominaga Joiner – Master Joiner and recipient of the title "Contemporary Master Craftsman" Keiji Tominaga
- Mural Artist – A distinctive painter advocating "ultimate amateurism" as his artistic philosophy Hideki Kimura
- Mammy Flower – Flower Artist  
Keita Kawasaki

Resin Artist

# 626 KOICHI SANO

レジンアーティスト  
佐野光一



レジンは、液体から固体へ変わる“時間”そのもの。  
佐野光一はその変化を、作品として封じ込めるレジンアーティストである。

制作は感覚だけでは終わらない。調色、脱泡、注型、硬化、研磨——各工程を数値と経験で管理し、狙った透明度と層の奥行きを設計する。  
一方で、硬化のわずかな揺らぎや光の回り込みが生む偶然を否定しない。  
制御と偶発、その境界にこそ作品の表情が宿ると考えるからだ。

ブランド名「626」は、秩序と無秩序、人工と自然の間に生まれる“揺らぎ”を象徴する。  
完成した作品は、見る角度や照明、距離によって印象が変化し、鑑賞者の動きとともに新しい輪郭を立ち上げる。静止物でありながら、体験としては動的だ。

626 の作品は、空間に置かれた瞬間から完成へ向かう。  
光を受け、影を落とし、見る人の記憶に残る——その一連の現象までを、作品として設計している。

Resin holds time in suspension—liquid becoming solid, moment by moment.  
Koichi Sano captures this quiet transformation and fixes it into form.

His process balances precision with release.  
Through careful color mixing, degassing, casting, curing, and polishing, he designs clarity and depth layer by layer. Yet he leaves space for chance: subtle shifts in curing, the way light bends and settles within the material. In this tension between control and surrender, each work finds its voice.

“626” represents a state of fluctuation—between order and chaos, nature and fabrication.  
As viewers move, the work responds. Light changes, contours emerge, and the piece reveals different expressions depending on distance and angle. What appears still is, in experience, quietly in motion.

A work by 626 comes into being within the space it inhabits.  
Light, shadow, and memory complete the piece, leaving behind not only an image, but a lingering sensation.



株式会社 農口尚彦研究所

2017年、「酒造りの神様」の異名をもつ日本最高峰の醸造家の一人、農口尚彦が2年のブランクを経て酒造りに復帰いたしました。

2017年11月に開業した当酒蔵は、農口尚彦の酒造りにおける匠の技術・精神・生き様を研究し、次世代に継承することをミッションとし「株式会社 農口尚彦研究所」と名付けられました。

70余年におよぶ酒造り人生の集大成として、生涯最高の「魂の酒」造りに挑み続けております。

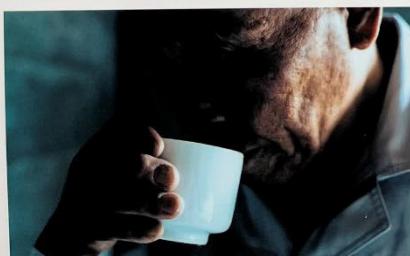
## 現代の名工・杜氏「農口 尚彦」



### ■プロフィール

1932年、能登杜氏で知られる石川県能登町に、杜氏一家の三代目として生まれる。16才から酒造りの道に入り、27歳と異例の若さで石川県「菊姫」の杜氏に就任。能登杜氏四天王の一人として一躍有名になる。その後、鹿野酒造などで杜氏をつとめあげ、2017年11月から当社杜氏に就任。農口尚彦が業界に与えた影響は大きく、1973年以降低迷を続けた日本酒市場の中で「吟醸酒」をいち早く広め、吟醸酒ブームの火付け役となる。また戦後失われつつあった「山廃仕込み」の技術を復活させ「山廃仕込み」復権の立役者となる。

全国新酒鑑評会にて連続12回、通算27回の金賞を受章。70年以上に渡る酒造り人生の中で数々の銘酒を生み出した。



### 【略歴】

1990年	JAL国際線ファーストクラス搭載日本酒として農口尚彦作の菊姫大吟醸が採用される。
2003年	著書「魂の酒」(発行:ボプラ社)発行。
2006年	卓越技能者に贈られる「現代の名工」認定。「厚生労働大臣表彰」受章。
2008年	「黄綬褒章」受章。
2010年	「プロフェッショナル仕事の流儀」「魂の酒、秘伝の技」(NHK総合テレビジョン)に出演。
2014年	「和風絶本家」「81歳の杜氏 農口尚彦 幻の銘酒再生秘話」(テレビ東京)に出演。
2017年	農口尚彦研究所の杜氏に就任。
2018年	ANA国際線ファーストクラス・ビジネスクラスでの複数年にわたる機内提供が開始。 「FNS 27時間テレビ」「ほんの食遺産」(フジテレビ系列)に人間食宝として出演。
2019年	「ニュースウォッチ9」「伝説の杜氏再び 86歳 新たな挑戦の日々」(NHK総合)に出演。 「農口尚彦の夢造(ゆめづくり)～86歳現役 酒造りの神～」(HAB北陸朝日放送)に出演。
2023年	「文化庁長官表彰」受章。 コラム「人間発見『90歳、死ぬまで酒造り』」(日本経済新聞夕刊)で連載。
2024年	「いしかわの食の巨匠顕彰」受章。

# LIBERTY WALK.®

THE LEGEND BEGINS

日本が世界に誇る改造文化  
“ワークススタイル”を  
世界に発信し続ける  
「Liberty Walk」





JAPANESE CUSTOMIZATION CULTURE "WORKS STYLE" BROUGHT TO YOU  
WITH PRIDE BY 「Liberty Walk」

「チューニング」や「ドレスアップ」ではない。  
今までこそ「カスタム」なんて洒落た言葉があるけれど、それとも少し違う。

「改造」。  
私たちのスタイルを表現するにはその言葉こそがしっくりきます。

パンパーを外し、違う車種のヘッドライトを移植し、そしてオーバーフェンダーを装着する、いわゆる昭和の時代の街道レーサー。  
日本古来のカスタムカーカルチャーのひとつであり、好き嫌いがはっきり分かれる“暴走族スタイル”をハイエンドカーをベースにやろう！  
そう考えたのが「LB☆WORKS」のスタートです。

「LB☆Performance」および「LB☆WORKS」の誕生について説明するには、ある人物に触れないわけにはいきません。

ある日、リバティーウォーク代表・加藤 渉の友人でもあったひとりのお客様が「ランボルギーニに乗りたい」と言いました。  
私たちが調達したディアブロに満足したそのお客様は、その後、ムルシエラゴに乗り替えました。  
しかし、ノーマルのムルシエラゴからはランボルギーニらしい猛々しさが感じられませんでした。

「もっと格好良くしたい」というお客様の要望もあり、  
2008年、私たちはムルシエラゴ用のオリジナルボディキットを開発することになりました。  
これがオリジナルブランド「LB☆Performance」の始まりです。

翌2009年、「LB☆Performance」のボディキットを装着したムルシエラゴをSEMA SHOWに出展。  
「LB☆PERFORMANCE」は世界デビューを果しました。  
しかし、来場者からの評判が良かったにも関わらず、ほとんどビジネスに繋がることはありませんでした。  
認められたのか、それとも認められなかったのか。モヤモヤした気持ちが後に残りました。

そこでやめてしまうのは簡単です。しかし、一度引いたらもう二度と前には出られません。  
私たちは“ワークスフェンダー”を装着した「LB☆WORKS」ムルシエラゴを新たに開発し、2012年のSEMA SHOWに出展しました。  
何千万円もするランボルギーニのボディに電動カッターの刃を入れ、“ワークスフェンダー”をリベット止めする「LB☆WORKS」。  
これのインパクトは強烈でした。

「LB☆WORKS」ムルシエラゴを見たアメリカの人々は、「日本人はここまでやるんだ！」と拍手喝采してくれました。

なお、「LB☆WORKS」ムルシエラゴのプロトタイプは前述した加藤の友人だったお客様の愛車がベースとなっています。  
大病を患って他界する1週間前、加藤はそのお客様に「世界で一番有名なランボルギーニにするから心配するな」と約束しました。  
その車両はD1グランプリの参戦車両へと生まれ変わり、現在も加藤名義で所有しています。

「私たちはこれからも背中に日の丸を背負って戦い続けます」



阿波指物

AWA SASHIMONO

富永ジョイナー有限会社 代表

Tominaga Joiner Limited Company Representative

現代の名工

Modern Master Craftsmen

四代目指物師

Fourth generation joiner

富永 啓司

Keiji Tominaga



## 主な実績 Main Achievements

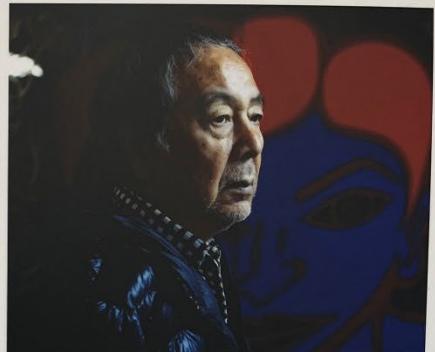
平成 22 年	2010
徳島建具展に於て徳島市長賞受賞	Received the Tokushima City Mayor's Award at the Tokushima Joinery Exhibition
平成 23 年	2011
徳島建具展に於て徳島県知事賞受賞	Received the Tokushima Prefectural Governor's Award at the Tokushima Joinery Exhibition
平成 24 年	2012
徳島そごうにて秋の夜長展 個展開催	Held a solo exhibition at the Autumn Nights Long Exhibition at Tokushima Sogo
徳島建具展に於て徳島県知事賞受賞	Received the Tokushima Prefectural Governor's Award at the Tokushima Joinery Exhibition
東京大学木材グリーンサークット参加講演	Participated in a lecture at the Tokyo University Wood Green Circuit
平成 25 年	2013
徳島県木材協同組合理事就任	Appointed as a director of the Tokushima Prefecture Wood and Furniture Cooperative
無添加建具・家具 発表	Announced Additive-Free Joinery and Furniture
平成 26 年	2014
フランス ジャパンエキスポ 15 「WABI-SABI」に出演	Exhibited at the Japan Expo 15 "WABI-SABI" in France
徳島県卓越技術者（阿波の名工）表彰	Received the Tokushima Prefecture Outstanding Technician Award (Awa Master Craftsman)
平成 27 年	2015
イタリアミラノ万博 徳島県依頼 阿波指物出展	Exhibited Awa Sashimono at the request of Tokushima Prefecture at the Milan Expo in Italy
平成 29 年	2017
台湾 国立台湾化技大にて阿波指物を展開および講演	Presented and gave a lecture on Awa Sashimono at the National Taiwan University of Chemical Technology in Taiwan
平成 31 年	2019
COOL JAPAN AWARD 2019 にて 「ミストミラー曲げ組子「波」」が受賞いたしました。	At the COOL JAPAN AWARD 2019, "Mist Mirror Bent Kumiko "Wave"" won the Outbound Category in the [General Division].
令和 2 年	2020
「心の風景」を作成	Created "Scenery of the Heart"
ロンドンのファイナンシャルタイムズ誌に日本のクラ	Featured in London's Financial Times as a Japanese craftsman.
フトマンとして掲載されました。	
令和 3 年	2021
「徳島木のおもちゃ美術館」のプロジェクトに参加	Participated in the "Tokushima Wooden Toy Museum" project
令和 5 年	2023
令和 5 年度 現代の名工を授与いたしました	Awarded the "Contemporary Master Craftsman" award in 2023
令和 6 年	2024
東京日仏学院 ロワゾー・ドゥ・フランスにて家具施工	Constructed furniture at the Tokyo Franco-Japanese Institute L'Oiseau de France
令和 7 年	2025
大阪万博 徳島ブースに「阿波指物」を出品	Exhibited "Awa Sashimono" at the Tokushima booth at the Osaka Expo

# PROFILE

壁画絵師

**木村英輝**

Hideki Kimura



1942年大阪府泉大津市生まれ。京都市立美術大学图案科卒業後、同大講師を務める。日本のロック黎明期に、オルガナイザーとして数々の伝説的イベントをプロデュース。

還暦より絵師に。手がけた壁画は国内外で250カ所を超える。

代表作に青蓮院門跡華頂殿襖絵、マツダスタジアムコンコース108折の鯉など。ロックと共に歩んできた半生は躍動感あふれる画面にもあらわれる。

アトリエでキャンバスに向かうのではなく、「ライブ」な街に絵を描きたい。究極のアマチュアリズムを標榜する異色の絵師。

Born in Izumiotsu City, Osaka in 1942. Graduated from Kyoto City University of Arts, Department of Design, and worked as a lecturer at the same university. Produced many legendary events as an organizer in the early days of rock music in Japan. Became a artist from the age of 60. He has created more than 250 murals in Japan and abroad. His representative works include the sliding door paintings of Kachoden in Shorenin Temple and 108 carp on the concourse of Mazda Stadium. His life-long involvement with rock music can be seen in his dynamic paintings. Instead of going to the canvas in his studio, he wants to paint in a "live" city. He is a unique artist who advocates the ultimate in amateurism.

Flower Artist  
**KEITA  
KAWASAKI**

フラワーアーティスト  
**川崎 景太**



東京生まれ。

1982年、カリフォルニア芸術工芸大学卒業。

メディアや展覧会などで、既存のアレンジメントの常識を打ち破る斬新な作品を次々と発表し、現代フラワーデザイン界を牽引。

2006年から2013年まで、フラワーデザインのパイオニアである「マミフラワーデザインスクール」の主宰を務め、後進の育成にも力を注ぐ。

2014年、アーティストとしての活動にいっそう注力すべく、オリジナルブランド「Keita」を立ちあげる。アパレル・建築・インテリアなど、さまざまなジャンルにおいて、暮らしに息づく「新・花文化」を提唱し、花や植物をテーマとするクリエイションを通じて「生きと生けるものの大切さ」を伝える独自のスタイルを確立。

多彩な表情を持つ作品の数々には「生きものとしての植物」という一貫した視点が通底し、現代社会に向けて「共生・共感」というテーマを投げかけている。



2015年以降の主な経歴 ◆

- 2015年 書籍「FORMIDABLE FLORISTS」(ベルギー)にて世界のフラワーアーティスト27人の1人に選ばれる。
- 2017年 Goyang(韓国)で開催された～世界のフラワーアーティストブースデザイン～の審査員を務める。
- 2023年 国立新美術館「21世紀アートボーダーレス展“Aurora”」にて招待作家として参加。RINKAの新作となる屏風2点を発表。
- 2025年 台湾の歴史的建築物“新芳春行”にて「HANA GRAPHIC ART」展を開催。日本の伝統工芸を取り入れたHANA GRAPHIC ARTシリーズを発表。

While each brought a distinct and powerful identity, their works converged seamlessly within a single unified space.

Together, they created a commanding presence that transcended the conventional boundaries of a “building materials fair.”

## Special Feature | Day One – February 12

On the opening day, we had the honor of welcoming Teruzushi, internationally acclaimed for its excellence in sushi craftsmanship, who conducted a live sushi demonstration at the venue.

The authenticity, precision, and presence of the performance immediately energized the space, drawing significant attention from attendees.

In addition, we were privileged to host special guests:

- Hakuho
- Hirotaka Urabe
- Yu Takahashi
- Bunta Inoue

Their visit further elevated the atmosphere, and the booth remained highly active and well-attended throughout the day.



Wood is not merely a material — it represents possibility.

This exhibition was an initiative to expand that potential and explore new dimensions of value creation.

We would like to extend our sincere appreciation to all who visited our booth, as well as to everyone involved in making this event possible.

Marudai Co., Ltd. will continue to deliver proposals that go beyond conventional boundaries and redefine expectations within the industry.